

「助演女優賞」

2024 12

新作『大好き ～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』は封切りからおよそ半年、反応はスコブルいい…。そして、待ち望んでいた自主上映の申込みが来始めた。ありがたい。

我がいせフィルムは、自主上映によって自主製作を支えられてきた、言えば命綱だからね。

このところ上映後のトークに、奈緒ちゃんのお母さん呼びたい、という声が多い。先日来た上映の申込みに添えられたメッセージには「“助演女優賞”の奈緒ちゃんのお母さんにトークをお願いしたい」という一文があった。今回の『大好き』の映画の中心になっているという意味では、お母さんは主演女優と言ってもいいくらいだけど…。でも、主演女優賞はやっぱり「奈緒ちゃん」かな？

映画『奈緒ちゃん』を撮り始めた40年以上前、その当時のカメラマン瀬川順一さんが私に、「この映画は、マリア様の物語だと思うんだ…」と、唐突に言ったことがある。私は私で、「…そうかもしれない」と聖母マリアのことをほとんど知りもしないのに、その言葉を受け止めたつもりになっていた。

50年近く撮り続けて今、言えることは、奈緒ちゃんのお母さんは、奈緒ちゃんを育てることで確かに豊かな人間性を身につけることができた、ということ…。聖母マリアのようであるかどうかは、私にはよくワカラナイ。

「いのち」を育むことで、豊かな人間性が生まれ、人は人に成っていく、ということ撮影を通じて目の当たりにしてきた気がする。

映画『大好き』は全編にわたって、奈緒ちゃんのお母さんが奈緒ちゃんを育てることで、自分が育てられた、と語り続ける映画、と言ってもいいかもしれない。ただただ、障がいのある自分の子どもを懸命に育てる中で、その奈緒ちゃんから受け止めてきた「ホントウノコト」を語り尽くす、極めてパーソナルな物語…。

だからこそ、誰にでも当てはまる普遍性がある。そこには“しあわせのようなもの”が写り込んでいるように思うのだ。

今年のノーベル平和賞を広島・長崎の原爆被害者の会、「被団協」が受賞した。「被団協」のメンバーが被爆の記憶を自分の言葉で粘り強く語り継いで来たことが評価されたようだ。

自分の体験を自分の言葉で語り伝え続けること…。

奈緒ちゃんのお母さんもまた、然り。

そんな一人ひとりに耳を澄ませて写しとるのが、ヒューマンドキュメンタリーの役割だと思う。

他人事でなく、自分事の語りを描くこと。

映画だって自分事で創ればいい…と私は思う。批判されても、無視されてもいいから、自分事の映画を創り続けるのだ。

映画『大好き』は、ノーベル賞をもらうわけでも、映画の賞をもらうわけでもないだろう…。だったら、『大好き』を産み、育ててくれたみんなに、私が勝手に賞をあげることにしよう。

奈緒ちゃんのお母さんには“助演女優賞”を、お父さんと弟の記一にも“助演男優賞”をあげて、奈緒ちゃんには、もちろん“主演女優賞”をあげてしまおう…。50年間、本当に「ありがとう」という想いを込めて。

50年間におよぶ映画創りを安いギャラで支えてくれたスタッフみんなと、製作支援の申し出に伝えてくれた多くの方々にも賞をあげたいけど、「ありがとう」を何度も何度も言わせてもらうことで勘弁してもらうしかない。

…

「ありがとう！」

これからも『大好き』を応援し、育ててほしい。自主上映、ヨロシクお願いします。

伊勢 真一